ちほのおしゃべりタイム

芭蕉が見た鵜飼

オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師
透（とおる） 千保（ちほ）

東海地方の各放送局（岐阜放送/ぎふチャン、FM GIFU、東海ラジオ、メ～テレなど）で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋市営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。
一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話応対などの研修講師を務め、人財育成に取り組んでいる。

さわやかな秋の風が心地よく感じられるようになり、鵜飼のシーズンも幕を閉じようとしています。過日、トークショーで、松尾芭蕉を祖師とする俳諧結社「獅子門」の道統41世であり、俳人の大野鵠士（おおのこくし）先生に話を聞く機会がありました。

芭蕉は、生涯に幾度か美濃を訪れていますが、貞享５（1688）年には、岐阜に１ヶ月余り滞在し数多くの作品を残しています。その中でも、「おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉」は代表作の１つ。かがり火に照らされ行われる幻想的で風情のある鵜飼も、鵜舟が去って行くと静寂さと深い闇に包まれます。その一抹の寂しさを詠んだと解されています。

ところが、大野先生によると「やがて」という言葉は、今の言葉で言えば「同時に」という意味を表しているのだとか。そこで芭蕉が感じたのは、鵜の哀れさであり、生きるために魚を獲らねばならない人間の悲しさを詠んだのだそうです。

この句は謡曲「鵜飼」を題材にしているとも言われています。安房の国清澄の僧が甲斐の国の石和（いさわ）川を訪れると、禁断の川で鵜飼をしたために殺生の罪で簀巻（すまき）にされた鵜使いの亡霊が現れ、僧の回向（えこう）によって成仏するという物語です。その時、対岸の極楽浄土へ連れて行く法（のり）の灯火（ともしび）が、鵜舟のかがり火だったということです。

この句を詠んだ後、芭蕉は「おくのほそ道」への旅へと出立することになるのですが、岐阜に滞在した翌年、伊賀の門人に宛てた書簡には、魚類を一切食べなくなったと書かれており、鵜飼は芭蕉の心に大きな影響を与えたようです。

岐阜に暮らす私たちの誰もが知っているこの句が、わずか十七文字のうちに目前に展開される鵜飼の光景を描き、そこに宴の後の侘しさと生きる業の哀しさという精神性を重層的に表現していることを知り、感慨に打たれました。こうした句を詠むには、深い洞察力と視野の広さ、そして鋭い感覚が必要なのでしょう。

わが身を振り返ってみると、自らの意志とは関係なく日々の膨大な情報に晒され、物事のうわべだけに対応して過ごしているように思えます。昨日起きた出来事が、翌日には古さを感じてしまうこともあり、ともすると私たちの心は、小さな小舟のようにどこかに流されてしまいそうです。この度、改めて芭蕉の句に触れることによって、物事を表層的にだけ捉えるのではなく、視点を変えて様々な角度から観ることの大切さを教えられたような気がしました。

当時、芭蕉の目に映った景色は、どのようなものだったのでしょうか。長良川と金華山周辺には多くの句碑があることから、芭蕉の旅を偲び散策してみたいと思います。